TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　705語

Pinocchio, Chapter 15

第15章　大きなカシの木につるされて

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　人殺したちに追われたピノッキオは、森の白い家にたどりつきます。窓から顔を出したのは、空色のかみの毛のふしぎな少女でした。でも助けは来ず……。



The Assassins chase Pinocchio, catch him, and hang him to the branch of a giant oak tree.

As he ran, the Marionette felt more and more certain that he would have to give himself up into the hands of his pursuers. Suddenly he saw a little cottage gleaming white as the snow among the trees of the forest.

“If I have enough breath left with which to reach that little house, I may be saved,” he said to himself.

Not waiting another moment, he darted swiftly through the woods, the Assassins still after him.

After a hard race of almost an hour, tired and out of breath, Pinocchio finally reached the door of the cottage and knocked. No one answered.

He knocked again, harder than before, for behind him he heard the steps and the labored breathing of his persecutors. The same silence followed.

As knocking was of no use, Pinocchio, in despair, began to kick and bang against the door, as if he wanted to break it. At the noise, a window opened and a lovely maiden looked out. She had azure hair and a face white as wax. Her eyes were closed and her hands crossed on her breast. With a voice so weak that it hardly could be heard, she whispered:

“No one lives in this house. Everyone is dead.”

“Won’t you, at least, open the door for me?” cried Pinocchio in a beseeching voice.

“I also am dead.”

“Dead? What are you doing at the window, then?”

“I am waiting for the coffin to take me away.”

After these words, the little girl disappeared and the window closed without a sound.

“Oh, Lovely Maiden with Azure Hair,” cried Pinocchio, “open, I beg of you. Take pity on a poor boy who is being chased by two Assass—”

He did not finish, for two powerful hands grasped him by the neck and the same two horrible voices growled threateningly: “Now we have you!”

The Marionette, seeing death dancing before him, trembled so hard that the joints of his legs rattled and the coins tinkled under his tongue.

“Well,” the Assassins asked, “will you open your mouth now or not? Ah! You do not answer? Very well, this time you shall open it.”

Taking out two long, sharp knives, they struck two heavy blows on the Marionette's back.

Happily for him, Pinocchio was made of very hard wood and the knives broke into a thousand pieces. The Assassins looked at each other in dismay, holding the handles of the knives in their hands.

"I understand," said one of them to the other, "there is nothing left to do now but to hang him."

"To hang him," repeated the other.

They tied Pinocchio's hands behind his shoulders and slipped the noose around his neck. Throwing the rope over the high limb of a giant oak tree, they pulled till the poor Marionette hung far up in space.

Satisfied with their work, they sat on the grass waiting for Pinocchio to give his last gasp. But after three hours the Marionette's eyes were still open, his mouth still shut and his legs kicked harder than ever.

Tired of waiting, the Assassins called to him mockingly: "Good-by till tomorrow. When we return in the morning, we hope you'll be polite enough to let us find you dead and gone and with your mouth wide open." With these words they went.

A few minutes went by and then a wild wind started to blow. As it shrieked and moaned, the poor little sufferer was blown to and fro like the hammer of a bell. The rocking made him seasick and the noose, becoming tighter and tighter, choked him. Little by little a film covered his eyes.

Death was creeping nearer and nearer, and the Marionette still hoped for some good soul to come to his rescue, but no one appeared. As he was about to die, he thought of his poor old father, and hardly conscious of what he was saying, murmured to himself:

"Oh, Father, dear Father! If you were only here!"

These were his last words. He closed his eyes, opened his mouth, stretched out his legs, and hung there, as if he were dead.

人殺したちはピノッキオを追いかけてつかまえ、大きなカシの木の枝につるしてしまいます。

走りながら、ピノッキオは、もうすぐ追っ手につかまってしまうにちがいない、という気持ちがだんだん強くなってきました。そのとき、森の木々のあいだに、雪のように白くかがやく小さな家が見えました。

「あの小さな家までたどりつけるだけの息が残っていたら、助かるかもしれない」とピノッキオは心の中で言いました。

少しも待たずに、ピノッキオは森の中をすばやくかけぬけていきました。人殺したちは、まだあとを追ってきます。

1時間近くもひっしに走って、つかれきって息を切らしながら、ピノッキオはやっとその家の戸口にたどりつき、戸をたたきました。だれも出てきません。

ピノッキオは、前よりも強く、もう一度たたきました。うしろから、追っ手の足音と苦しそうな息づかいが聞こえてきたからです。やはり、しんとしたままでした。

たたいてもむだなので、ピノッキオはどうしていいかわからなくなり、戸をこわしてしまいそうないきおいで、けったりたたいたりしはじめました。その音を聞いて窓が開き、美しい少女が顔を出しました。少女は空色のかみの毛をしていて、顔はろうのように白く見えました。目はとじていて、両手を胸の上で組んでいました。聞こえないほど弱々しい声で、少女はささやきました。

「この家には、だれも住んでいません。みんな死んでしまいました。」

「せめて、戸を開けてくれませんか？」とピノッキオは、すがるような声でさけびました。

「わたしも死んでいるのです。」

「死んでいる？じゃあ、窓のところで何をしているの？」

「わたしを運んでいくひつぎを待っているのです。」

そう言うと、少女の姿は消え、窓は音もなくしまりました。

「ああ、空色のかみの毛の美しい少女さん」とピノッキオはさけびました。「おねがいです、開けてください。かわいそうな男の子を助けてください。追いかけられているんです、2人の人ごろ――」

言い終わらないうちに、2本の力強い手がピノッキオの首をつかみ、あのおそろしい2つの声が、おどすようにうなりました。「さあ、つかまえたぞ！」

目の前に死がちらつくのを見て、ピノッキオははげしくふるえ、足の関節がカタカタ鳴り、舌の下の金貨がチャリチャリと鳴りました。

「さあ」と人殺したちはたずねました。「口を開ける気になったか、どうだ？ははあ！返事をしないのか？よし、今度こそ開けさせてやる。」

2人は長くてするどいナイフを2本取り出し、人形の背中を力いっぱい2回つきました。

さいわいなことに、ピノッキオはとてもかたい木でできていたので、ナイフはこなごなにくだけてしまいました。人殺したちはナイフのにぎりを手にしたまま、がっかりして顔を見合わせました。

「わかったぞ」と1人がもう1人に言いました。「もうこいつをつるすしかない。」

「つるすしかない」と、もう1人がくり返しました。

2人はピノッキオの両手を背中でしばり、首になわの輪をかけました。そして、大きなカシの木の高い枝になわを投げかけて、かわいそうな人形が空高くぶらさがるまで引っぱりあげました。

2人はやりとげたことに満足して、草の上にすわり、ピノッキオが息を引き取るのを待ちました。ところが3時間たっても、人形の目はまだ開いていて、口はとじたまま、足は前よりもはげしくばたばたさせていました。

待ちくたびれた人殺したちは、ばかにしたようによびかけました。「では、またあした。朝もどってきたときには、ちゃんと死んでいて、口も大きく開けていてくれるとありがたいね。そのくらいのれいぎは守ってくれよ。」そう言って、2人は立ち去りました。

数分たつと、はげしい風がふきはじめました。風がヒューヒューとうなるたびに、かわいそうなピノッキオは、かねの中のぼうのように、右へ左へとゆさぶられました。ゆさぶられて気分が悪くなり、首のなわはだんだんきつくなって、息がつまってきました。少しずつ、目の前がかすんできました。

死はどんどん近づいてきました。それでもピノッキオは、だれか親切な人が助けに来てくれることを願っていましたが、だれもあらわれませんでした。もうだめだというとき、ピノッキオはかわいそうな年老いたお父さんのことを思い出し、自分が何を言っているのかもよくわからないまま、つぶやきました。

「ああ、お父さん、大好きなお父さん！ここにいてくれたらなあ！」

これが、ピノッキオのさいごの言葉でした。ピノッキオは目をとじ、口を開け、足をのばして、まるで死んだようにぶらさがっていました。

たんご と クイズ　第15章　大きなカシの木につるされて

cottage	小さな家	**snow**	雪	**door**	戸・ドア
window	窓	**hair**	かみの毛	**knives**	ナイフ（knifeのふくすう形）
rope	なわ・ロープ	**oak**	カシの木		

Q1 窓から顔を出した少女のかみの毛は何色？

① 金色　② 空色　③ まっ黒

Q2 ナイフでつかれても、ピノッキオが平気だったのはどうして？

① かたい木でできていたから　② よろいを着ていたから　③ すぐににげたから

Q3 さいごに、ピノッキオはだれのことを思い出しましたか？

① もの言うコオロギ　② 火食い親方　③ お父さん

こたえ

Q1　②　少女は空色（あわい青）のかみの毛をしていて、顔はろうのように白く見えました。

Q2　①　ピノッキオはとてもかたい木でできていたので、ナイフのほうがこなごなにくだけてしまいました。

Q3　③　もうだめだというとき、ピノッキオはお父さんを思い出し、「ここにいてくれたらなあ」とつぶやきました。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。